
S M二元論の主張

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S M二元論の主張

【Nコード】

N 5 7 4 6 J

【作者名】

りきてつくす

【あらすじ】

あたしってば、ちょー筋金入りのM女なわけ。でね、この世にいる全ての人間は絶対SかMのどっちかに当てはまるんだって、ずーっと信じてたの。ところがね……（ボクの創作仲間である名野創平先生の作品からヒントを得て書きました）

前篇

この作品を、創作仲間である名野創平先生に捧げたいと思います
……………ぷすっ（笑）

およそこの世に生をうけたすべての人間は、程度の差こそあれSかMのいずれかに分類される、ってゆーのがあたしの持論なのね。
「え、俺は違うよー」なんていう虚偽妄想は許さない。だってあたしたちの生きてるこの世界って、なにかにつけ天地万物みな二極分化されていると思うのよ。たとえば男と女でしょー、あ、オネエはこのさい脇においてね、あと陰陽道で言うところの陰と陽でしょー、勝ち組に負け組でしょー、それからほら、草食系、肉食系なんて言うじゃない。え？ 論点がズレてる？ いいんだってば、あたしが勝手にそう思ってるだけなんだからあ。まあとにかく、人は老若男女、生殖能力の旺盛か否かにかかわらずみーんなSかMどちらかの資質を持ち合わせていると思うわけー。

ちなみにここで言うSは硫黄の元素記号じゃないし、Mも浜崎あゆみの楽曲名じゃないからねー、念のため。

そう、サディストとマゾヒストのことなのよん！

かくいうあたしは、もう筋金入りのドMなのー。

その素質はそうねえ、自分がまだほんの幼い時分からすでに備わっていたような気がするわ。うちの母ってばそれは厳しいひとで、子どものあたしがちょっとでも悪さしようものなら「こんわろ、こげんこっして！」って容赦なく尻をぶつたの。あ、ちなみにあたしの出身地は鹿児島県ね。でね、お尻をぶたれるときってスカート捲し上げてパンツ下ろされるじゃない。あの冷やつとした緊張があたりのお尻をなでる一瞬の、そうね、言うなれば諦観と期待感がないまぜになったような、めくるめくエクスタシーがもうたまらなく好きだったの。無防備なあたしの肉体にこれから情け容赦のない仕打

ちがなされるんだって考えただけで頭の中がぼーっとしてきちゃって。うちの母って若い頃バレーボールやってたじゃない。だから手なんかスゴくおっきいし、そこから繰り出されるスパイクといったそれはもう強烈で、それでもって手加減なしにバツチンバツチンたたいてくるもんだから、もう気持ちいいのなんのって……あたしってば白目むいたまま失神して何度も救急車ではこばれたことあるのよ。

あ、ちよつと話が逸れたわね。で、そんな超ドMな女の子のあたしだったから、たとえ恋人が出来ても長続きしなかったのね。ほら、えっちの最中について感極まって、

「ねえお願い、あたしのことぶって……」

なーんてお願いしちゃうでしょう。そうするとたいがいの子はまず間違いなく引いちゃうわけ。ほんと、世の中って軟弱でつまんない男が多いわよね。

でもね、中には案外そういうのに興味津々な子もいて、

「えー、君ってそういう趣味があつたのかい？」

なんて好奇心で目をきらきら輝かせたりするのね。で、あたしもこれは脈ありかな、なんて思ってた試しにスパンキングとかさせてみるんだけど、そうするとね、最初はおっかなびつくりやってたのが、だんだん楽しくなってくるんでしょね、もう目えつり上げて腕ぶん回してくるし、しまいには自分のベルトとか持ち出して鞭の代わりに使ってくるわけ。革のベルトだと、SMプレー用のバラ鞭なんかと違ってくつきり痕が残るくらい殺傷力あるから、もうハンパなく痛いし、体の芯がじーんって痺れるみたいになって、しまいにはあたし、

「ああん、気持ちいい！　もっと強くぶってー。もう、おっぱい食いちぎっちゃってえー」

なんて夢中で体くねらせて哀願しちゃうわけよ。めくるめく官能のひとときってやつ。こういうの水魚の交わりっていうんだっけ？　違ったかしら？　とにかくマジ感じちゃって、あたしもう、いつ

そのまま死んだっていいかもつ、なーんて本気で思ったものなのよん。

でもね、そうやってあたし好みのS男君を調教して、緊縛プレーとか思う存分堪能してたわけなんだけど、こういうのって素人が見よう見まねでやるのスゴく危険なのよね。ある日、そいつが変な縛り方したせいであたし急に息ができなくなっちゃって「ぐるじい、じぬー、じぬー」っていうような事態におちいっちゃったの。でもそいつぜんぜん気づかなくて、どうせ気持ちよくてよがってるんだろうって薄ら笑い浮かべながら見下ろしてくるのね。まあ、えっちのときはいつも「死ぬー」「死んじやうー」って叫んでたから仕方ないんだけど、でもそのうち頭にどんどん血が上って顔がむくんでくるし、鼻水やよだれなんかもダラーって垂れてきてぜんぜんシヤレにならない状況になってきたわけよ。で、やっとそいつもおかしいなって気づいたみたいで、あわてて縄ほどきにかかるんだけど、もう縛り目がぎゅって固く締まってるからどうにもなんないの。で、あたしはっていうと、だんだん意識が遠のいてきて、これまで自分が経験してきたSMプレーの数々が走馬灯のように頭の中をよぎっていくのね。ああ、あのときは気持ちよかったなあって……。そうこうするうちに、とうとう頭の中的情景が、お花畑のひろがるきれいな景色と入れかわっちゃって……………。

で、結局あたしはそのまま死んじゃったわけなんだけど。あはは、人の一生なんてあつけないものね。

それでね、あたしがすでに息してないってことが分かったと、そいつ真っ青な顔して部屋飛び出して行っちゃったのね。あたしの死体をそのままそこに残してよ。まあ一種の放置プレーってやつね。けつきよく同じアパートの住人から異臭がするって苦情を受けて管理会社の人調べに来たのは三日後のことだったわ。野次馬が注目するなか合鍵使っておそろおそろ部屋に入ってみると、な、な、なんとそこには大股開きで縛られてるあたしの腐乱死体がどーん……で、かわいそうに、あの管理会社の人もう二度と焼き肉とか食べら

れないでしょうね。

だけどね、SMプレー中に窒息死なんてぜんぜん洒落になんないわけだけど、悶絶しながら事切れる瞬間で、それはもう筆舌に尽くせぬくらいの快感だったわ。まあ、一生に一度しか体験できない超究極のMプレーってやつね。

てなわけで、死ぬまぎわにそんなすごい経験しちゃったもんだから、この世に未練が残ってしまったてね、死んでもあたし、なかなか成仏できずにあてどもなく下界をさまよっていたわけなのよん。

??

前篇（後書き）

ここ、後篇へつづく……（汗）

中篇（前書き）

ごめんなさい。書ききれなかったので中篇をはさみます（汗）

中篇

「ねえ、きみ……」

すきま風が吹きこむような声で背後から呼びかけられ、聡平はびっくりと顔を上げた。なぜだか背筋にぞくぞくと寒気が走る。今のは空耳だろうか、それにしてもはやくにはつきり聞こえた気がするが。後ろを振り向こうかやめようか迷っていると、ふたたび声がした。
「ねえってばあ」

今度は少し鼻に掛かったような声だ。どうやら若い女性らしい。関わりたくない気もするが呼ばれたら返事をしないわけにもいかず、聡平は油の切れた扇風機みたいなぎくしゃくした動きで後ろを振り返った。とたんに、わっと仰け反ってベンチから転げ落ちる。

「ひ、ひえっ」

すぐ後に、派手な格好をした若い女の人が立っていた。腰に手を当て、じつと聡平のことを見下ろしている。化粧こそ派手だがなかなかの美人だ。ふつうならば、はっと胸がときめくような場面だが、しかしそうはならなかった。なぜなら彼女がクラゲのように半透明だったからだ。そのスレンダーな体を透かして、背後に広がるテニスコートや銀杏の木立がぼんやりと見えてしまう。

「お、お化け……」

聡平は、腰を抜かしたまま、ずるっずるっした後ずさった。

「ちよつと、なんで逃げるのよ、もう失礼しちゃうわねー」

女は、網タイツをはいたきれいな足を跳ね上げてひらりとベンチを乗り越えた。タイトスカートの裾から、きわどいデザインの下着がちらりとぞく。

「あわわわ……」

聡平は慌てて四つん這いになると、鞭で逐われる家畜のように必死に逃げはじめた。

「こら待てっ」

すると女は、まるで捨てられたコンビ二袋が風で舞い上がるようにふわりと身を浮かせ、そのまま、ゆいーんゆいーんとジグザグに飛びながらあとを追いかけてきた。

「ひいっ」

死にものぐるいで逃げる聡平の頭上を難なく飛び越えた女は、その鼻先へすんと着地して退路をふさぐ。いきなり眼前にセクシーな太もが現れ、聡平はのけ反ったはずみでころんと仰向けにひっくり返った。

「きゃはは、大げさな子ねえ。べつに怖がらなくてもいいんだってばあ」

「だ、だってお姉さん……、お化けなんでしょ？」

聡平が半泣きで言うと、女はぐいっとな胸を反らせた。

「そうよ」

「ひえー」

裏返した亀のようにぶざまに手足をばたつかせた後、聡平は再び起き上がり、転がるように逃げ始めた。

「ちよっと待ちなさいって言うてるでしょっ！」

だが、地べたを這うものが空を飛べるものから逃れるられるはずもない。すぐにまた女が飛んで来て逃げ道に立ちふさがる。ついに聡平は観念して、その場にへたりこんだ。

「降参……、もう逃げないから取り殺さないで」

「うんうん、最初からそうやって素直にひとの話を聞けばいいのよ」満足そうに微笑むと、女はまた水中をただようクラゲのように、ゆわーんゆわーんと空を飛んで元いたベンチにふわりと腰かけた。そして自分の隣をぱんぱんと叩く。どうやら横に座れとうながしているようだ。逆らっても無駄だと分かり、聡平はまるで筋肉の代わりにバネでも仕掛けられているようなぎこちない歩きでベンチへと戻っていった。そして女からきつちり一人分の間隔をとって腰掛ける。

「そ、それで……、あの、僕に何かご用でしょうか？」

天敵を警戒する齧齒類のような眼差しを向けて聡平が訊いた。すると女は、うつてかわって優しい表情になり小首をかしげて見せた。「あんたさあ、ここ最近ずーっと自殺しちゃうか、なんて考えてたでしょう?」

「え?」

「隠したってダメよ、あたしにはちーやんと分かるんだからあ」

女は、そう言って意味不明の微笑みを見せながら、ずりつとにじり寄ってきた。

「幽霊ってね、普通の人には姿が見えないけど、病気や怪我で死にかけてる人や、自殺しようなんて考えてる人には見えちゃうものなのよ。だからね、あんたの目にあたしの姿が見えてるってゆーことは、本気で死にたがってるって証拠なのよん」

図星を指されて観念したのか、聡平はしょんぼりうなだれてしまった。そんな彼に、女はやさしく微笑みかける。

「あんた、中学生?」

「……はい」

「ひよつとして、がっここでイジメにあってるのか?」

「……い、いえ」

「違うの?」

「……は、はい」

「あたしの思い違いだったかしら?」

「……いえ」

「どっちなのよ?」

「……はい」

「えーい」

女が恐い顔で立ち上がった。

「もう、はつきりしなさいってばあつ!」

「うひゃ」

大声に驚いて再びベンチから転げ落ちる。どうやらかなり気の短い幽霊のようだ。聡平は、やっとの思いで身をおこすと、まるで口

ツククライミングでもするように、ずりっずりっとベンチへ這い上がった。そして女を警戒しながら端っこのほうにちょこんと座る。一度大きく息をついて、それから聡平は少し怨みがましい視線を女に向けた。

「でも、お姉さん……。もし僕が学校でイジメにあっているとてさ、それがお姉さんに何の関係があるっていうの？」

すると女はやさしい笑顔にもどり、聡平にぴったり身を寄せてきた。彼女の体は、まるで石かガラスで出来ているみたいに冷たくて、聡平は思わずぶるっと身震いする。そんな彼の肩になれなれしく手を回し、女は耳元で囁いた。

「……あのねえ、あんたが学校でどんな風にイジメられてるのか、そのへんのことをお姉さんに詳しく聞かせてほしいの」

相談に乗ってくれるということだろうか？ 聡平は少しだけほっとした。最初見たときは悪霊のたぐいに違いはないと思ったが、意外と生きている人間のことを助けてくれる良い霊なのかもしれない。

「なるべく具体的にね、臨場感をこめて」

「は、はい」

聡平は、それでもしばらくのあいだ俯いたまま膝の上でからめた指をこによこによ動かしていた。ちらと女に目をやる。彼女の黒目がちな瞳が、好奇心にみちてきらきら輝いていた。そこでようやく決し、聡平はおずおずと顔を上げた。

「……うちのクラスにね、木戸ってやつと山崎ってやつがいて、そいつらがいつもクラスの誰か一人をターゲットにしては、ひどいイジメをするんだ。ターゲットにされた子はそれは悲惨で、学校に出てこなくなるまで徹底的にイジメられるんだよ。でもクラスのだれも、あいつらには逆らえないんだ。それどころが、機嫌を損ねないよう一緒になつてイジメをやってる。だって目を付けられるといつ自分がターゲットにされちゃうか分かんないからね。僕の前にイジメられてた子なんか、登校拒否を繰り返したあげくに自殺未遂して……今は精神病院に入ってるよ」

「ふーん……」

女が気のない声で相づちをうつた。あれ？ てつきり親身になつて聞いてくれるものと思つていたのに。聡平はちよつとだけ拍子抜けした顔になった。

「でね、木戸つてやつ親は、なんか政治の仕事をしてる偉い人らしくて、うちの学校のPTA会長とかもやつてるんだ。だから先生がたはもちろん、校長先生だって木戸の親に会えばいつもぺこぺこしてるし、そのせいで先生は、木戸たちがどんなに悪いことしても見て見ぬふりをするんだ。おかげで、あいつらいつでもやりたい放題さ」

聡平がそこまで語り終えると、女はつまらなさそうにため息をついた。

「あのねえ、あたしが聞きたいのはそういうことじゃなくって」

「はあ……」

驚いて目を瞬かせている聡平の耳元に唇をよせ、女がもう一度囁いた。

「具体的にどんな辱めを受けてるかってことなのよん。ほら、顔をひっぱたかれるとか、カンチョー！ って叫んでお尻の穴に指突っ込まれるとかさ、あともしかしたら裸で縛られて溶けたローソク垂らされるなんてのも、ね、色々あるじゃない……」

ああ、やっぱりこのお姉さん悪霊だ。

聡平は、確信した。

中篇（後書き）

じ、次回こそ本当に後篇です！

後篇の前篇（前書き）

も、もはや言い訳はすまい……。。

後篇の前篇

熱をおびた女の視線が、痛いほど聡平に突き刺さってくる。それは恍惚として輝いていながらも腐りかけた果汁のように濁っていた。例えるなら、セックスをねだるときの女の目だ。そんな魔性をおびた眼光に射すくめられ、聡平は体を強ばらせたまま鳥肌を立てていた。

自分とはんでもないものと関わり合ってしまった。

きつと悪霊に違いないんだ。

「ねえ……」

彼女が、また囁いた。グロスに濡れる上唇をぺろりと舐める。甘酸っぱい息がただよってきて、聡平は軽いめまいを感じた。女の指がすつつと伸びてきて、派手にペイントされた爪の先が聡平の頬を上下に撫でる。やがて彼はすっかり女の毒気に当てられ、身じろぎすら出来なくなってしまった。ただ黙って女の顔を見つめているしかない。

その女の、口の合間から覗く白い歯が、その奥でうねうねと蠢くピンク色の舌が、そこから発せられる湿りをおびた息が、何度もこう囁いていた。

イジメラレテルンデショウ？

ついに聡平は、こくりとうなずいてしまった。

「はい……、僕は学校でイジメにあっています」

すると女はにんまり笑い、今度は耳に触れるほど唇を近づけて、こう囁いた。

「じゃあ、学校でどんな風にイジメられてるのか、お姉さんに詳しく、お、し、え、て」

聡平は膝のうえに置いた拳をぎゅっと握りしめた。自分へ向けら

れたイジメに関する記憶は、極力意識の外に置くようにしている。

いわゆる現実逃避というやつだが、それゆえ、心の封印を解いて自分が惨めな思いをしたその内容を語るということは、もう苦痛以外の何者でもない。彼は一度唇をきゅっと噛み締めてから自分のつま先へ視線を落とし、そして絞り出すような感じで、とつとつと語りはじめた。

「……例えば、よく僕の下駄箱からは上履きが盗まれています。たいてい代わりにトイレ用のスリッパが入れられていて、上履きは、どこかの教室のゴミ箱か、男子用トイレの便器の中へ放り込まれているんです」

聡平がやつとそこまで語ると、女は両手で頬を包み込んで夢見るような目つきで言った。

「まあ素敵。スリッパをばたばた鳴らしながら必死になって自分の上履きを探している、その姿をみんながにやにやして眺めてる。いいわあ、それってぜったい屈辱的よねー」

女が続きをねだる。

「ねえ他には？ まだあるんでしょう？」

「はい……、朝、教室へ入ると」

「うんうん、教室へ入ると？」

「どこからかチョークが飛んできて、僕の後頭部を直撃します。すると教室内からどつと笑いがおこり『ナイス』という声援が飛び交います」

「きやはは！ それいいよ、めっちゃイジメられてるって感じるうー」

女は手を打って少女のようにはしゃいだ。なにが面白いというのだ。聡平は少しむっとなったが、しかしつとめて表情には出さないうつ心がけた。悪霊を怒らせると後が怖い。

「それとですね、僕の机にはいつも落書きがされてるんです」

「落書き？ どんな？ 『豚野郎』とか？」

「いえ……、『お前なんか学校に来るな』とか……『たのむから死

んでくれ』とか……『卒業まで毎日地獄を見せてやる』とか……」

しだいに気持ちが高ぶってきたらしく、聡平の声が涙まじりになる。いっぽう女はというと、こちらも気持ちが高ぶってきたらしく、さかんに身悶えながら喘いでいた。

「あん……、言葉で責められるのって快感。あたし『メス豚』なんて言われたらマジ अच्छا ちゃうかもしないー」

「ぼ、僕がイジメられていることが、そんなに面白いんですか？」

聡平が涙目で抗議すると、女はきやはは！ と笑った。

「バカねえ、あんたがイジメられたって別に面白くもなんともないわよ。あたしはね、あんたがイジメられてる状況を自分のことに置き換えて、それで空想の世界にひたっているわけー」

「お姉さんには分からないんだ。毎日毎日、僕がどんなにつらい思いをしているか……」

「えー、なに贅沢なこと言ってるのよー。もう羨ましいったらありやしない、あたしが代わってあげたいくらいだわ」

そう言っただけで軽く睨んでくる女に向かって、聡平は涙をぬぐいながら言った。

「じゃあ、ボクと代わってください。じつはもうすぐここへ、さつき話した木戸と山崎が来るんです。奴らは小遣いを使い果たすと、いつもこうやってボクを呼び出しては金を巻き上げるんです。でも、もうボクには奴らに渡すお金がない。この前、母の財布からお金を抜き取るところを見つかってしまいました。もうボクにはお金がない。だから黙って奴らに殴られるしかないんです。もういやだ、ボクはこんな毎日にはもうウンザリしてるんです。いつそ死んでしまいたい。ねえ、お姉さん、そんなにイジメられるのが好きなら、ボクと入れ替わってくださいよ」

すると女は聡平の両肩をがっしりと掴んで、その顔を真正面から睨みつけた。そして獲物を追いつめた肉食獣のようなぎらついた目で、こう言った。

「それホントね？ あたしがあんたに取り憑いてもいいのね？」

聡平は、ひるんだ。感情にまかせて自分とはとんでもないことを言ってしまった。この悪霊は、完全に本気だ。どうしよう……。しどろもどろになっっていると、女が重ねて言った。

「じゃあ今からあんたに乗り移るから、ちよつとのあいだ目を閉じててくんない。だいじょうぶよ、痛くないから」

「え、いや、自分は別にその……」

「ほら、早くう。あんたの望みを叶えてあげるんだからあ、黙ってあたしの言うこと聞きなさいってばあ」

「いや、さっき言ったのはものの例えで……」

煮え切らない聡平を、女が一喝した。

「しえからしかあつ！」

とつぜん飛び出した鹿児島弁に恐れをなしたのか、聡平は覚悟をきめてぎゅっと目を閉じた。くすくすと女の忍び笑いが聞こえる。

と……、あの甘酸っぱいような吐息が次第に鼻先へ近づいてきて、

聡平は少なからず狼狽した。

え、これって……。

いきなり女の熟れた唇が聡平のそれと重なった。ひやりと冷たくて、しかも柔らかい感触がまるでデザートのような果物を思い起こさせる。すぐに女の舌が押し入ってきて、聡平の口の中をウネウネとかき回した。やがてふわっと甘い唾液が大量に流れ込んできて、聡平はそれを、喉を上下させてコクコクと飲み込んだ。同時に、何者かが強引に侵入してくる感覚におそわれ、しだいに体が麻痺してゆく。やがて彼は、おのれの体の中が、なにがとてつもないエネルギーで満たされてゆくのを感じた。

ああ、彼女が入ってきた。

遠のく意識のかたすみで、聡平は、勝ち誇ったような女の笑い声を聞いた気がした……。

後篇の前篇（後書き）

次回こそ完結すると思います。
……たぶん。

後篇の中篇（前書き）

ははは……（汗）

後篇の中篇

木戸と山崎が盗んだ自転車に二人乗りしてやって来たのは、それから間もなくのことだった。すぐに聡平のことを見つけ、へらへらしながら近寄ってくる。二人ともひよろりと背が高く、見るからに頭の悪そうな顔をしていた。とくに山崎のほうは、鼻につけたピアスが酸化して黒ずみ、まるでホクロか巨大なハナクソをつけているようにも見える。二人はのらくらとペダルを踏みながら聡平の前までやって来ると、きいっとブレーキをきしませて自転車を止めた。

「おいこらっ、金は持って来たんだろうなあ？」

木戸が、ぐつと聡平を睨みつけて凄んだ。自分ではドスを利かせたつもりだろうが、いかんせん変声期の途中なので迫力に欠ける。それでも流行の服を下品に着くずし、アクセサリーをじゃらじゃら鳴らしている彼らの存在は、やはり聡平にとって脅威だったに違いない。

彼はのっそりと自転車の荷台から降りると、噛んでいたガムをぺつと吐きすてた。

「おい、どうなんだ、調子こいてダンマリ決めてつと、またこの前みたいにパンツ脱がすぞ」

そう言つて山崎と顔を見合わせ笑った。威嚇をこめた下卑た笑いだ。しかしそれを聞いた聡平は、とつぜん身をくねらせ始めた。

「ああん、それなら自分で脱ぐからそう命じてよう」

笑い声がぴたりと止んだ。木戸が眉間にしわを寄せ、聡平の胸ぐらをつかむ。

「あん？ なに言つてんだ、おめー？」

彼の、渾身の三白眼がぐつと睨みつけてくる。不良のお兄さんがたというのは、どこでこういう恐い顔のつくりかたを練習しているのか、なかなか堂に入った迫力ある表情だ。しかしそんな彼を熱っぽい視線で見上げながら、聡平はうふつと媚びた笑みを浮かべた。

「その目、いいわあ……、サディストの目ね、あんた素質あるわよ」
「はあ？」

「ねえお願い、あたしにパンツ脱げて命じて、すっ裸になってそこへ跪けて命令してよぉん」

木戸は思わず聡平の服から手をはなし、顔を引きつらせながら後ずさった。

「な、なんだこのやろう、急に変な声出しやがって……」

彼の腫れぼったい目が不安げにおよぐ。まるで、てっきりカブトムシだと思って捕まえたらしつはゴキブリだった、みたいなそんな顔だ。いっぽうの聡平は、すでに嬉々としてズボンのベルトを外しにかかっていた。ついでに、うつふんと意味不明のウィंकを送ってくる。木戸はなんだか薄ら寒くなり、山崎のほうを振り返って目で助けを求めた。

「お、おい、こいつ頭狂ってるぞ……」

「ばーか、笑いをとって、ごまかそうとしてるんだよ。かまわねえからボコっちまおうぜ」

へらへら笑いながら、山崎が自転車から降りた。前歯が一本抜け落ちていて本当にバカっぽい顔をしている。彼はルーズフィットのジーンズをずるずる引きずりながら聡平の前までやってくると、いきなりその頬を張った。ぱーん、といい音がして聡平の小さな体がぐらりと揺らぐ。

「へたな芝居うつてんじゃねえぞ、こらあ！ さっさと金よこせつつつてんたろが！」

そう叫んで、今度は腹に蹴りを入れた。うつと呻いて、聡平が前屈みになる。そこへ気を取りなおした木戸が横から割り込んできて、髪の毛をわし掴みにしながら自分のほうへぐいつと引き寄せた。

「おいこら、これ以上痛い目に遭いたくなかったら……」

しかしそこで彼は、はっと息を飲んだ。みるみるうちに表情が凍り付いてゆく。

聡平の顔が、にたーっと笑っていたのだ。

半びらきにした目が裏返って、口の端からはよだれがたれている。なにか悪いクスリでもやってるんじゃないのか？ そう疑いたくなるような陶然たる面持ちで、薄ら笑いを浮かべているのだ。

「ああ、久しく忘れていたわ、この感覚……。体の奥がもうしびれちやうつて感じ。なんて言うかな、おへソの下のほうでバターがじゅんって溶けちやうみたいな気持ち。もう一度この快感が味わえるなんて、まるで夢のよう……。ねえ殴って、お願い、もっと本気であたしのことを殴ってよう」

そう言って、木戸のジャンパーにすがりついてくるのだ。

「わわわっ、なんだこいつ気持ち悪い」

木戸は、大慌てで彼の手を振りほどくと、飛び退いて言った。

「おい、やばいよ、こいつやっぱ頭おかしいよ」

「ちくしょう！」

山崎が、怒りにまかせて聡平の尻を蹴り上げた。きやっと呼んで聡平がうずくまる。その背中をさらに靴のかかとで踏みにじった。

「てんめえ、ふざけたことばっかぬかしてると……」

「ああん、踏まれるのって、ちょー屈辱的でめっちゃ快感ですうー」

聡平が身をくねらせながら熱のこもった視線で見上げてくる。山崎のバカっぽい顔にも、ついに恐怖の色が浮かんだ。

「ひいつ、ななな、なんだこいつ」

そして恐怖心に駆り立てられるように、倒れている聡平を狂ったように蹴りはじめた。

「こいつめっ、このっ、このっ」

そこへ木戸もやってきて、恐る恐る仲間に加わる。

「こ、このやろう、変態っ、死ねっ、死ねっ」

そんな必死の形相で襲いかかる二人を尻目に、聡平はさらなる快楽を得ようとズボンを下ろしにかかった。

「ちよつと待っててね、今ズボン脱ぐから…… あん、やだなによこれー、もう前が膨らんじやあって上手く脱げないじゃないの」

「だ、黙れっ黙れっ」

木戸のつま先が、聡平のみぞおちに食い込んだ。

「ぐぼっ　　ちょ、ちよつと待ってね、今ズボン脱ぐから……」

「う、うるさい、喋るんじゃないやねえ」

今度は山崎の蹴りが背中にあたる。聡平は体を弓なりに反らせた。
「うぎっ　　ち、ちよつと待ちなさいってば、ズボン脱げないじゃない……」

「ひいつ、変態、死んでしまえ」

さらに木戸の靴底が、聡平の顔面をとらえた。泥だらけの顔から鼻血がたれる。

「むごっ　　つて、ちよつとあんたらしい加減に……」

「変な声出すな、この化けもん」

いよいよ、とどめだと言わんばかりに山崎が足を大きく振り上げた……。

と、そのとき　　突然、聡平がぬつと起き上がった。そして鬼の形相でくわつと目を剥く。

「てげてげせんか！　　こん馬鹿したんがあ！」

そう叫ぶと、山崎に飛びかかって、ぱんぱーん！　と往復ビンタを食らわせた。ついでに急所を思い切り蹴り上げる。

「ぶぐっ……」

哀れ　　、山崎は股間を押さえたままぐずれ落ち、そのまま泡をふいて動かなくなつた。そんな彼の様子を呆然と見下ろしながら、聡平はわなわなと身を震わせていた

「……　　ちよつとやだ、なによ今の？　　ねえ、なんなの？　　こいつ殴つたとき信じらんないくらい、ちょー最高に気持ちよかつたんですけどお」

後篇の中篇（後書き）

ほんと、もうしわけないです
（T T）

後篇の後篇の前篇（ウソです……最終話です）（前書き）

やっと完結しました。ありがとうございます（T-T）
内容がちょっとアレなのは、このさい目をつぶってやってください
ネ。

後篇の後篇の前篇（ウソです……最終話です）

山崎の股間を蹴り上げたとき、聡平は今まで体験したことのないようなものすごい快感に襲われた。まるで感電したみたいに体が痺れ、エクスタシーが脊柱管を通してイナズマのように五体をつらぬく。それは今までマゾプレーでしか得られなかった快感とは明らかに異質な感覚だった。大量のアドレナリンが体中を駆けめぐり、彼は破裂しそうなほど高鳴る胸を押さえたまま、虚ろな眼差しを宙に向けた。

「……ちよつと、なんなのよ、いったいどーゆーこと？ このくそガキのキンタマ蹴りつぶしたとき、なんか信じられないくらい気持ちよかつたんですけどお」

これまでの人生で、彼は被虐に耐えることでしか悦びを見いだせなかった。自分はもう筋金入りのマゾヒストだと信じて疑わなかった。だからセックスのときはいつも自分が虐げられることしか念頭になかったし、そういう願望を叶えてくれそうな男としか付き合わなかった。しかし、たった今自らが経験したこの未知なるエクスタシーは、むしろ今まで追い求めてきた快樂とはまったく逆の性質を持つように思われた。

あたし……、じつはサドだったりして。

彼は、ちよつとのあいだ考え悩んだすえ、その答えを確かめるべく地べたにうずくまる山崎をもう一度蹴り上げてみた。ようやく急所の痛みも和らいで、もそもそと起き上がろうとしていたやさき、山崎は再びもんどりうって地べたを転がった。

「ひいっ」

さらにその顔をスニーカーのかかとで踏みつける。山崎は、少女のような金切り声を上げ、顔を押さえてのたうち回った。指のあいだから、だらだらと鼻血が流れ落ちる……。

「痛でででっ、や、止めるお」

ああん、気持ちいい、他人を虐げるのがこんなに気持ちいいだなんて今までちつとも知らなかったわ……。やばい、あたしいきそう。

聡平は、体の奥底からマグマのようにわき上がる暴力的な愉悦に耐えきれず、身悶えてはあはあと喘いだ。パンツの中身がびんびんに怒張しているのが分かる。自分の絶対的支配下におかれている無力な命を踏みにじるのって、なんて気分がいいんでしょ。もうムチでしばかれたりなんかするより、断然気持ちいい！

「た、たのむつ、もう止めてくれ。金ならいらないから、な、もう勘弁してくれ」

鼻血でまっ赤に汚れた顔を歪めてひいひい泣き叫ぶ山崎を見下ろしながら、聡平はにたりと口角をつりあげた。すでに目が完全に据わっている。油の膜をはったように、てらてらと不気味に光っている。その狂気じみた眼差しで、彼はまるで料理の具材でも吟味するかのように山崎の全身を舐めまわした。

「うふふ……あんたって、可愛いわあ。待っててね、もつともつと虐めてあげるから」

それを聞いて、山崎は胎児のように丸まったままガタガタと震えた。札つきの悪としてそれなりに修羅場をくぐり抜けてきたつもりだが、これほどまでに自分へと向けられた暴力に恐怖したことはない。イジメる側から一転してイジメられる側へと転落した喪失感。それはもう、裸のまま猛獣の檻の中で横たわるような心細さだった。てつきり自分は山の頂きに陣取っているんだと思い込んでいたら、じつは深い深い海の底に沈んでいたのだ……。

恐怖にすすり泣いている山崎にちらつと慈しむような視線を投げかけたあと、聡平はいきなりスニーカーの先端でその尾？骨を蹴りつけた。

「へげ」

めきつと鈍い音がした……。

山崎は、声にならない呻きをもらすと体を弓なりに反らせ、びくんびくんと痙攣したまま動かなくなった。目がくると裏返ってい

る。

「あらあ、坊やってば、もう昇天しちゃったのね。つまんないわ……」

そのとき、背後でカチツという金属的な音がした。ふり向くと、木戸が飛び出しナイフを右手に構えている。目が奇妙なほどにつり上がっていた。腰が引け、膝が笑い、聡平の狂乱ぶりに完全にビビっている様子だが、しかし彼はなぜかへらへらと笑っていた。どうやら人間というものは、恐怖の限界を超えてしまうと、いわゆる躁状態になるらしい。彼は手にしたナイフをひらひらさせて、口元をゆがめながら言った。

「えへへ、この野郎、やってくれるじゃねえか。そっちがそういうつもりなら、こっちだって本気でいくぜ。これなんだか分かるか？ 言っとくがオモチャなんかじゃねえぜ。今こいつでブスつとえぐってやつからよう、覚悟しな……」

しかしそれを見て、聡平は大好物のスウィーツを目の前にした女の子のように舌なめずりした。

「あら、素敵なこと。そのナイフでもって、あんたのおちんちん切り落としたら、さぞかし気持ちいいでしょうね？ ザーメンと血が混じり合ったら、ピンク色になるかしら」

こ、こいつ狂ってる。刃物をぜんぜん怖がらない。

ふたたび底知れぬ恐怖が、木戸の中でさざ波のように広がった。

彼は半開きの口で、ぜえぜえあえぎながら後ずさりした。膝が面白いように震える……。

「ここに、このやろう、与太こいてんじゃねえぞ！ 近寄るんじゃねえ。き、来たらこのナイフで膾のように切り刻んでやるからな、脅しじゃねえぞ」

「あら、それは楽しみ。切り刻んだってかまわないわよ、ほーら、ほらほら、やってごらんなさいな」

木戸は生唾を飲み込もうとしたが果たせなかった。口の中がからからに乾いている。なにか言い返そうとしたが、喘息の発作のよう

に喉がひゅと鳴っただけだった。

「いいわ、あんたが向かってこないなら、あたしがあんたを楽しませてあげる。もう鯉のたたきみたいに体中の骨をバラバラにしてやるんだから」

聡平は薄ら笑いを浮かべたまま、ズボンの腰からベルトをすつと抜き取った。そしてムチのようにだらんと提げる。そのままバックルの部分を重りにして遠心力をつけ、ひゅんひゅんと振り回した。そうしながら彼は、木戸との距離をじわりじわりと詰めていった。ナイフなど毛ほども恐れている様子はなかった。いっぽうの木戸は、蛇に睨まれた蛙のように恐怖で全身をこわばらせていた。後ずさりながら石につまずいて尻餅をつく。やがて恐怖は頂点へと達した。意味のないことを喚きちらしながら、彼は手にしたナイフを滅茶苦茶に振り回しはじめた。

「ひーっ、来るなっ、来るなっの。来たらほんとに刺すぞ、後悔するぞ、てめえ！」

そんな木戸を冷ややかに見下ろしながら、聡平は落ち着きはらって狙いをさだめるとベルトをひゅんと一閃させた。たちまち木戸の手からナイフがはじけ飛ぶ。ぎゃつと悲鳴を上げ、彼は右手を押さえて呻吟した。どうやら指の骨が折れたようだ。

「さあさ、お楽しみはこれからよん」

聡平は、今度はバックルのほうを持ち手に変えると、それでもつて狂ったように木戸を打ちはじめた。革製のベルトがムチのようにしなり、木戸の体を容赦なく痛めつける。服の上からでも、肉のきしむ音が聞こえてくる。ひいひい言いながら地べたをのたうち回ったあげく、ついに彼はしゃーっと失禁してしまった。

「ひいーっ、ひいーっ、止めて、もう止めてくださいよ、お願いします」

「それを言うなら、おゆるし下さい女王様でしょう」

「おおお、おゆるしください女王様、これからは心を入れかえて真面目に生きます。もう決して他人をイジメたりしませんから」

「西郷どんの、敬天愛人の精神じゃっど」

「わわわ、分かりました。分かりましたから、もう止めてー」

「ほーほほほっ。もう最高にいい気分なこと。まるで夢みたいね。浮世の中に、こんなに気持ちのいいことが残されていたなんて」

泣き叫びながら許しを乞う木戸を追い回し、聡平は嬉々として革のベルトを振るった。もう、めった打ちである。木戸は小便のためアンモニア臭を放つジーンズを引きずりながら、殺虫剤をかけられたゴキブリのように這い回った。

「ひいっ、ひいっ」

「おーほほほ、無抵抗な者をいたぶるって、なんて楽しいんでしょ。ああっ、いいわー、あたしもついきそうよー、このままいつちゃってもいいかしら」

サディズムとは、もしかすると人間をふくめたすべての肉食動物に根源的に備わっている生命衝動なのかもしれない。じわじわと獲物を追いつめてゆく悦び。そして追いつめた獲物の息の根を止める興奮。木戸を思う存分打ち据えることによって、彼は次第に恍惚の境地へと入りこんでいった。もう、このまま絶頂を迎えるしかない。そう覚悟をきめると彼は、両手にしっかりと握ったベルトを大上段に振りかぶった。

じゃあ最後に、きつーい一発お見舞いするわよ。

「や、止めてえええっ」

「ちえすとおーっ！」

紫電一閃

振り下ろしたムチは、小便でぐしょぐしょに濡れた木戸の股間を直撃した。

「ぴぎゃーっ！」

衝撃で体がびくと跳ね上がり、あまりの痛みに木戸はうーんと目をまわしながらブリッと脱糞した。同時に聡平のほうも、うっと呻いて白目をむく。パンツの中で、何かがほとばしる感覚があった。わなわなと体が震える。がくつと膝をついて放心状態になると、や

がてその体から、なにやら邪悪な存在がすつつと抜けていった……。

気がつくと、聡平は一人ぼっちで公園ベンチの前にたたずんでいた。すでに日はとっぷりと暮れ、道路をへだてて隣接する野球練習場からはナイター設備の明かりが漏れだしている。

木戸と山崎はどうやら、命からがら逃げおおせたらしい。聡平の前には盗んできたと思われる自転車だけが乱暴に乗り捨てられていた。

少し肌寒い。ぶるつと身震いしてから、彼はそつと股間に手を当ててみた。パンツの中が、どろつとした液体で汚れているのが分かる。ふうと息をつく。なんだかとても疲れた。でも、けつしてい嫌いな疲れじゃないとも思う。むしろスポーツで汗を流したの後のような開放的で心地よい疲労感だ……。

彼は今、自分がとても清々しい気持ちになっていることに気づいた。これまで自分をがんじがらめに縛りつけてきた、とても窮屈な空間から解き放たれた思いがする。

素敵だ。

ゆつくりと宵の空を見上げてみる。

人間って本当に素敵だ……、口では上手く説明できないけれど、なぜだか素直にそう思えた。

人は、他人に痛みを与え、あるいは他人から与えられた痛みを受け止めることによって、生命に宿る神秘というものを強く感じ取って生きている。そんな気がする。きっと、人の一生というものは、ある意味においては苦痛でもあろうし、またある意味では快樂そのものに違いないのだ。理屈はよく分からないが、そんな確信めいた思いが聡平の心を満たしていた。

みんな、あの悪霊のお姉さんのおかげ……かな？

ふと、あたりを見回してみる。彼女の姿はもうどこにもなかった。

どこへ行ってしまったのか、もはや気配すら感じない。きっと満足して天国へ上ったのか、それとも飽くなき快樂をもとめて再びどこか遠いところへさまよっていったのか……。

いずれにしても、自分はもう彼女と会うことはないだろう。

なぜなら、

僕は、がんばって生きてゆくんだ

今、力強くそう思うことが出来るからだ。

不意に彼は、自分の右手が今もベルトのバックルをしっかり握りしめていることに気づいた。あのお姉さんが、木戸をさんざ打ち据えたベルトだ。ふと思いついて、ベルトをつかんだ腕をゆつくりと振り上げてみる。なんだか胸がときめいた。大きく息を吸いこみ、いち、にの、さん、で反動をつけて、ムチのように思い切り振り下ろした。ぴしっ、と鋭い音がして足下の砂利がはじけ飛ぶ。心臓がどくんと脈打った。最高に気分のいい音だ。

知らず知らずのうちに、顔がほころんでいた……。

了

後篇の後篇の前篇（ウソです……最終話です）（後書き）

お読みくださり、ありがとうございました。

名野創平さんとは、去年開催された『犯罪が出てこないミステリー企画』で知り合いました。最初にその作品を読んだとき、なんて美しい文章を書く人だろうと思いました。しかも読者を飽きさせないよう、終始エンターテイメントに徹している。すごい人がいるもんだなあと感じし、以後ボクは名野創平さんのことを勝手に永遠のライバルと決めてしまいました。

今回こうして、名野創平さんのお誕生日にちなんで作品を投稿させていただきましたが、内容がぶっ飛んでいるのは名野創平さんの作品からそういうインスピレーションを得たからです。本当に面白いですから、ぜひ読んでみて下さいネ。

でわでわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5746j/>

S M二元論の主張

2010年10月8日15時24分発行